

宇野浩二作

でたらめ経

朗読 中島幸子

第三卷 3. 宇野浩二「でたらめ経」



宇野浩二（うの こうじ）

1891年（明治24） - 1961年（昭和36）。福岡県に生まれ、幼児に大阪に移る。早稲田大学在学中、「誠二郎 夢見る子」を刊行。その後、翻訳の下請けや童話を書いて生活の資を得ていたが、1919年（大正8）「蔵の中」を発表し、新進作家として注目を集め、「苦の世界」「軍港行進曲」など大阪育ちの饒舌とユーモアあふれる筆致で人間の生の生活を描いた。「夢と詩の合奏」を屈指した大正期を代表する作家の一人と言われる。代表作は「子の来歴」「器用貧乏」「思ひ川」など。作家の多くが児童文学を“余技”として捉えていたのに対し、宇野は児童文学に深い関心を示し、生涯に渡って多くの作品を残した。

「でたらめ経」は、「一軒家に住む婆さんは旅人にお経を教えってくれと頼む。だが旅人はお経を知らないの目につくものを片っ端から口にしてお経にしてしまう。お婆さんがその通りに唱えていると、その晚泥棒がやって来た」という内容だが、宇野浩二のユーモアが見事に開花した作品といえよう。発表は1925年（大正5）。

むかし、あるところに、それはそれは正直なおばあさんが住んでいました。けれども、このおばあさんは子もなければ、孫もないので、ほんとうの一人ぼっちでした。その上、おばあさんの住んでいたところは、さびしい野原の一軒家で、となりの村へ行くのには、高い山の峠を越さねばなりませんでしたし、また別のとなり村へ行くには、大きな川をわたらねばなりませんでした。

だから、おばあさんは毎日々々ほとけ様の前に坐って、かね鉦ばかりたた叩いていました。きつとこのおばあさんにも、以前は子や孫があつたのかも知れません。それがみんなおばあさんより先に死んで、ほとけ様になったのかも知れません。だから、さびしいので、そうして毎日ほとけ様ばかり拝んでいたのでしょう。

それに、食べるものは裏の畑に出来ましたし、お米は月に一度か、二ヶ月に一度川向う

の村へ買いに行くので用は足りましたし、水は表の森のそばに、綺麗な綺麗な、水晶のよ
うなのが湧わいていましたし、——だから、おばあさんは何にも心配することも、いそがし
い用事もない訳でした。

ただ、時々近くの街道かいどうを往来する旅の人が足を疲らしたり、咽喉のどをかわかしたりして、
おばあさんの家うちへ一ふくさしてくれとか、水を一ぱい御馳走ごちそうになりたいとかいって、寄
ることがある位のものでした。

ある日の夕方のことでした。一人の旅人がこの家の前を通りかかりまして、これから急
用があつて、夜通しで山を越えて行かねばならぬものだが、少し休ましてほしいとおばあ
さんに頼みました。

「お安いことじゃ。どうぞ遠慮なくお休みなさい、」とおばあさんはいいました。
そこで、旅人はおばあさんからお茶などを呼ばれながら、縁側に腰を下ろしてしばらく

休んでいましたが、さて疲れもなおりましたので、

「おばあさん、いろいろ御馳走さまでした、」といって、お札に少しばかりのお金を紙に包んでおこうとしますと、

「そんなものは入りません、どうぞこれはおしまい下さい、」とおばあさんはびっくりした顔をしていました。「わたしの家は御覧の通り茶店を商売うちにしている訳ではありません。それに、こんなものをいただくほどお世話もしないのですから、これはどうぞおしまい下さい。」

「いや、それはそうであろうが、これはわしのほんの志いなんだから、どうか取っておいて下さい、」と旅人はまた旅人で、いろいろにいつて勧めましたが、どうしてもおばあさんの方では受取ろうとしません。が、おばあさんはふと何か思いついたと見えて、

「そんなら旅の方、わたしの方からお願いして、外ほかのものをお札にいただきましょう。」

「外のものというのは、どういうものですか？」と旅人は不思議そうな顔をして聞きかえしました。

「外のものというのは、外のものでもありませんが、御覧の通りわたしは年寄で、こな一軒家に一人ぼっちで住んでいるものですから、外に何のたのしみもありませんですから、お金などをいただいても、つかい道がありません。折角いただいても、いただくのなら、つかい道のあるものと思ひまして……」

「おばあさんにつかい道のあるものというのは何だね？」と旅人はおばあさんの話が廻りくどいので、こう急せぎ立てて聞きました。

「それはね、ほら、あそこに仏壇がありますでしょう。」とおばあさんはやっぱり落着いた調子で、「わたしは暇さえあると、あそこにお線香を立てたり、花を立てたりして、そしてただ鉦を叩いて拝んでいるだけなのでございます。……」

「そのほとけ様が一体どうしたというんだい、おばあさん？」と旅人は少しいらいらしながら尋ねました。

「それで、おばあさんはわしに何がほしいというんです？」

「それで、そのわたしは、そうして毎日ひまさえあると、鉦を叩いて拝んでいるのですが、ただ拝んでいるばかりで、お経の文句を少しも知らないもんですから、誠に不自由をしているのでございます。それで、旅の方、わたしのお願いというのは、お経の文句を教えてくださいいただきたいので、それならわたしに早速有難くつかい道があります訳で……」

「お経の文句！」と旅人は頓とんきよう狂な声でいいました。何故頓狂なぜな声でいったかというあいにくと、旅人は生憎お経の文句なぞ少しも知らなかったからでした。おばあさんはそんなこととは知りませんから、

「ね、旅の方、お見受けしたところ、あなたはお立派な方だから、きっとお経の文句を

御存知に違いない。どうぞ、ほんの少しでも宜いから教えて下さいませ、お願いでございます」

お立派な方、といわれたので、旅人は嬉しくなつてしまいました。これで、お経の文句を知らないなぞといったら、恥かしいわけだと思いましたが、

「そりやお経の文句ぐらいなら知っているが……」と答えました。

「御存知なら、どうぞ、旅の方、是非お教え下さいませ。実はこれまでにいろんなお方
にお願いしたのですが、この辺を通る方に、お経の文句を知ってる人が一人もありません
ので……こんにち今日こうしてあなた様がお見えになったのは、ほとけ様のお引合せに違いありません。
さあ、どうぞお教え下さい。」

こういわれると、ますます旅人は後へ引けなくなりました。といって、今もいった通り、お経の文句など、ひとつ一言も知らないのですから、本当に困ってしまいました。で、き

よろきよると、あつちを見たり、こつちを見たりして、はじめ初のうちは、おばあさんのすきをうかがって逃げ出そうと思つた位ですが、何をいうにもおばあさんが余り真面目まじめで正直なものですから、そんなずる狡いことをして、逃げることもありません。おばあさんはもう鉦を前において、旅人が口を開くのをじつと待っている様子です。仕様がなないので、旅人は度胸をきめて、何かお経の種たねになるものはないかと、ふと家の奥の方を見ますと、おばあさんの大切な仏壇が、外のどの道具よりも目立って、立派にきらきらと光っています。

仏壇の中には線香をくすべる香炉があります。香炉の傍そばには花立はなたてがあります。

「さあ、どうぞ早く教えて下さい、」とおばあさんが急せき立てるものですから、旅人は困つた余り、ふと思いついて、出鱈目でたらめに、しかし出来るだけお経らしい節をつけて、

「香炉や、花立や、花立や、香炉や、」と唱えました。すると、おばあさんはその文句と節をそっくりと真似まねて、

「香炉や、花立や、花立や、香炉や、」といって、「チン」と叩き馴なれれた鉦を叩きました。よく合いました。そこで、「これはまったく覚えいいお経で、ほんとうに有難う存じます。どうぞその先を、ついでに、もう少しお教え下さい、」と顧みしました。

旅人は困って、もう一度、「香炉や、花立や、花立や、香炉や……」と同じことをいっているうちに、何か外のものを見つけて、それを読み込もうと気をくばっていますと、仏壇の棚たなのところねずみに、鼠ねずみがちよろちよろと出て来ました。旅人は心の中うちで、「これだ！」と思ったものですから、早速声を張り上げて、「鼠ねずみが一疋ぴきごにゆうらい御入来、鼠ねずみが一疋御入来、」とつづけているうちに、棚の上の鼠はちよろちよろと逃げて行ってしまったので、

「かと思ったら、すぐに逃げてしまったア、」といいました。おばあさんはそんな事とは知りませんからそれが真面目なお経だと思って、「鼠が一疋御入来、鼠が一疋御入来。かと思つたら、すぐに逃げてしまったア、」と唱えて、そこでまた、「チン」と鉦を叩きました。

「ほんとうに、これはこれは分りやすい、結構なお経でございます。」とおばあさんは大喜びでいいました。「これなら、わたしののような年寄りでもよく覚えられます。旅の方、どうぞもう少しその先をお教え下さいませ。」

旅人はまた困りましたが、仕様がありませんので、その先を、「鼠が一疋御入来、かと思つたら、すぐに逃げてしまったア、」とくり返して唱えているうちに何か思いつくだろうと、仏壇の方を見ていると、先さつきの棚の上に、今度は鼠が二疋連れで、ちよろちよろと何か相談し合うような恰好で歩いて来ました。そこで旅人は早速、「今度は二疋連れで、何だか相談をしながら、ちよろちよろと御入来、」といっているうちに、どうしたのか、二疋は大急ぎで逃げて帰ってしまいましたので、旅人はこれもお経の種にして、「ところが驚いて、大急ぎで逃げて帰ったア、」といって、もうこの先を頼まれたら、本当に困ってしまうと思つたものですから、

「さア、これだけで一と切りです。」といいました。

「今度は二疋連れで、何だか相談をしながら、ちよろちよろと御入来。ところが驚いて、大急ぎで逃げて帰ったア、」とおばあさんは相変らず大真面目で、旅人の唱えた通りに唱えて、

「チン」と上じょうず手に拍子をとって鉦を叩きました。そして、大へん満足したように、「どうも結構な、覚えいとお経を教えて下さいまして、有難う存じます。では、旅の方、初めからわたしが一人でもう一度さらえて見ますから、間違いないか、聞いておって下さいませ、」といって、

「香炉や、花立や、花立や、香炉や、鼠が一疋御入来、かと思つたら、すぐに逃げてしまったア。今度は二疋連れで、何だか相談をしながら、ちよろちよろと御入来。ところが驚いて、大急ぎで逃げて帰ったア。チン、チン。」

それを半分まで聞いていないうちに、「結構々々、」と旅人は可笑しくおかてたまらなくなり
ましたので、そっと逃げて行ってしまいました。

その晩のことでした。そういう正直なおばあさんの家のことですから、別に夜になつて
も、

戸締りをするようなことはありません。ただ、冬は寒い風が吹く時に戸を締めておき、夏
は暑苦しい時に戸を開け放あしておく、といった風でした。

その晩、となり村から山を越えて来て、別のとなり村の方へ川を渡って行こうとする、
二人連れの男がこのおばあさんの家の前を通りかかりました。この二人は泥棒が商売で、
これから川を越して、向うの村へ着くと夜中頃になりますから、そこで一と仕事をするつ
もりだったのです。が、泥棒のことですから、ふと、このおばあさんの家の前を通りかか
ると、戸が開け放しになっていて、目星めぼしいものはなさそうですが、「行きがけの駄賃だちんだ」

という考えで、一と稼かせぎしようと思ひました。のぞいて見ますと、中に一人のおばあさんが仏壇の前に坐つてゐるだけで、外に人のいる気配がしません。そこで泥棒の甲が泥棒の乙に、

「おい、お前、ここで張はり番ばんをしていてくれ。こんな寂しいところだから、人の通りかかるようなことはないだろうが、もしこの家の者で外に出ている奴やつがあつて、そいつが帰つて来たりするようなことがあると事だから。おれ一人で沢山だ、」といひました。

その時、家の中ではおばあさんが、昼間旅ひるまの人から習つたお経を始めるところでした。
「香炉や、花立や、花立や、香炉や……」

そこへ、泥棒の甲がそつとおばあさんに見えないように家の中に忍び込んで行きました。ところがびつくりしました。

「鼠が一疋御入来……」とおばあさんがいっています。人のことを鼠だというばかりで

なく、見えるはずがないのに人が入って来たのが見えるのか知ら、と泥棒は思つて、気味が悪くなつたものですから一度表へ引返そうとしますと、おばあさんのお経はつづいて、

「かと思つたら、すぐに逃げてしまつたア、……」

泥棒の甲はもうびっくりしてしまつて、あわてて表に飛び出して待っていた相棒に、

「どうも気味の悪い家だよ、^{うち}」といひました。「たしかに家の中にはおばあさんが一人しかいないんだが、どうも気味の悪いおばあさんだよ。頼むから、お前も一緒に行つて見てくれないか。」

そこで、今度は二人連れでそつと家の中に忍び込みました。忍び足で歩きながら、泥棒の甲が泥棒の乙に、

「あのおばあさんだよ。ああして向う向いていながら、後に目があるんじゃないか、^{そば}と思うんだ、」と耳の傍でいつている時に、

「今度は二疋連れで、何だか相談をしながら、ちよろちよろと御入来、チン」と鉦を叩きながらおばあさんがお経の文句を続けました。

泥棒はそれが出鱈目に教わったお経を読んでいるのだとは気がつきませんから、びっくりして、あわてて引返そうとしますと、「ところが驚いて、大急ぎで逃げて帰ったア。チン、」とおばあさんはお経をつづけました。

それを背中に聞きながら、二人の泥棒は夢中で表に逃げて出ました。

「ああ、驚いた。あのおばあさんは何だろう。きっと化物ばけものか何かだよ。後に目がある

んだよ。しかも人のことを鼠だなんて……畜生！」といい合いながら、二人の泥棒は川の岸のところまで、あと後も見ないで、息を切らして逃げて来ました。そして、はッと顔を見合わせて、ため息をつきました。

おばあさんは、自分の知らない間に、そんな事があつたとは少しも知らないものですか
ら、泥棒が帰つた後でも、「折角教わつたお経だ。よく覚え込むまで、何度もやっておこう」

ひとりごと
と独言をいいながら「香炉や、花立や、花立や、香炉や……」

とまた初めからさらい出しました。が、今度はもう鼠も泥棒も出て来ませんでした。